

特集2 まちのコモンズ2009 船場建築祭4

SPECIAL 2 'Urban Commons 2009', The 4th Senba Architectural Festival

2009年11月16日(月)から21日(土)までの6日間、船場アートカフェの主催で船場の街を会場に、「まちのコモンズ2009」を開催した。前身である「船場建築祭」の開催から数えると今年で4回目となる本プロジェクトは、船場アートカフェが毎年開催する数多くのプロジェクトの中でも、最も規模の大きなものである。

■まちのコモンズとは

「まちのコモンズ」とは、街の様々な空間資源を活用して、地域がもつ歴史や文化などを広く一般に発信することによって、都市空間の文化的共有による地域活性化の可能性を探ろうとするものである。今年は昨年の高麗橋2丁目に隣接する伏見町2丁目、道修町2丁目を加えた3町に拡大し、東西約200m、南北約100mのエリアが対象となった。船場は商都大阪の中心として栄えた歴史的都市であるが、近年は産業構造の転換や長引く不況によって街から活気が失せ、そこに超高層マンションの建設などによる新居住者が出現するなど、その変化に対応できずに多くの問題・課題を抱えている。本プロジェクトは、大きな潜在力を持ちながらも、その文化力を発揮できない船場の変革を視野におさめた取り組みである。2006年と2007年はとりわけ近代建築を対象に活用の可能性を検証したが、2008年からは近代建築に限らず、街に潜む様々な空間資源に着目し、その場所がもともと持つ魅力を引き出したり、あるいは新たに外部からアートを投入することで活用の可能性を実証するといったことを試みている。

■街を会場にした様々なプログラム

実施された具体的なプログラムは以下の通りである。まず初日から5日目まで毎日開催したのものとして、「アジア音楽ライブ」と「まちかど映像展示」がある。アジア音楽ライブでは高麗橋にある三井ガーデンホテル淀屋橋の公開空地に仮設ステージを設置し、日替わりでアジア各国の民族音楽がプロの演奏家らによって演奏された。街の雑踏に混じるアジアの調べに足をとめ、夕方会社帰りに多くの人が耳を傾けた。まちかど映像展示では道修町に面した薬品関連企業の2つのビルのエントランスに仮設スクリーンを設置し、日没から通りに向かって2つの映像を上映した。道修町の歴史を江戸時代から現在までわかりやすく解説した映像番組と、道修町の祭りである神農祭の風景を写した昭和30年代の8ミリフィルム映像である。ちょうどまちのコモンズ終了の翌日からはじまる神農祭にあわせて、祭りや街の歴史に対する関心を高めてもら

おうという意図をもっていった。

最終日である21日(土)には高麗橋に建つ近代建築のひとつ、1930年建築の浪花教会の礼拝堂を会場に、「文化・芸術によるまちづくりの可能性」と題してシンポジウムを行った。京都の中心市街地にある旧・立誠小学校校舎を拠点に地域の文化・芸術振興を推進する京都市の宗實良彦氏を基調講演に招き、船場アートカフェからは嘉名光市(工学研究科准教授)がまちのコモンズについて報告を行った。また、シンポジウム開催前には市大の学生などによって組織される「船場研究体」がガイドとなって、船場を案内する「北船場まちあるきツアー」が実施された。更に船場研究体ではこれにあわせたガイドマップも作成した。



シンポジウムが行われた浪花教会の様子

今年のまちのコモンズで特徴的だったのは、毎日テーマと会場を変えながら行った「セミナー&サロン」シリーズである。月曜日から金曜日までの5日間、さまざまな歴史的空間で船場の文化力を多彩なラインナップで紹介して好評を博した。16日(月)に開催した「芦屋小雁が語る『番頭はんと丁稚どん』」は、フィルムコレクターとして知られる俳優・芦屋小雁氏にコレクションを上映しながら語ってもらうトークショーであった。会場は重要文化財に指定される旧・小西家住宅(1903)で、薬種業を営む大商家であった、船場でも数少ない木造町家の遺構である。そこで上映した『番頭はんと丁稚どん』は昭和30年代に大きな人気を博したテレビ番組の映画化で、まさに道修町の薬種問屋を舞台に繰り広げられるコメディドラマであった。フィルムには当時の道修町をはじめ、大阪各地の名所も出てくる。芦屋小雁氏は丁稚の一人としてこの映画に出演した本人である。江戸時代から続く薬のまちで、明治時代に建てられた薬種問屋の座敷を会場に、高度経済成長期に撮られた道修町を舞台にしたコメディを上映し、出演した俳優から当時の話を伺おうという、まさにまちのコモンズに相応しいプログラムとなった。



芦屋小雁が語る「番頭はんと丁稚どん」

その他、17日(火)には菓の神様として知られる少彦名神社(登録文化財)を会場に、宮司の別所俊顕氏から道修町を見守り続けた神社の歴史を伺う「初心者のための神農さん講座」を行い、18日(水)には高麗橋にある高級老舗料亭「吉兆」を会場とした「吉兆お餅つき」でつくたての餅を雑煮にして振る舞った。19日(木)には高岡伸一(都市研究プラザ特任講師)がガイドとなって「近代建築ナイトツアー」を実施、普段なかなか内部へ入ることのできない町内4カ所の近代建築を巡ってその魅力を解説した。20日(金)にはその近代建築のひとつである伏見ビル(1923・登録文化財)を会場に、劇作家のわかぎ糸ふ氏を招いて「『レトロ』がきらわれていた頃の話」と題した対談を行った。故・中島らも氏がかつて1980年代に伏見ビルに事務所を構えていた時期があり、当時をよく知るわかぎ氏に昔話を語ってもらい、現在と当時のレトロ建築をめぐる状況の違いや、船場を舞台にした劇作もある氏ならではの話を伺った。

■まちとの協働

「まちのコモンズ」は船場アートカフェ単独で開催することはできない。まちの方々と協働が不可欠なプロジェクトである。今回も3町の各振興町会との共催とし、特に町会長の各氏には企画段階における関係者との調整や、町内での広報などで大きな協力を得た。また船場地区の修景やまちのにぎわいづくりを目的に組織された船場地区HOPEゾーン協議会とは、同時期に開催される互いのイベントに関して広報協力などを行っている。その他堺筋の文化活動を行う堺筋アメニティ・ソサエティや、船場のまちづくり活動の集合体である船場げんきの会などにも側面からの協力を要請した。このようなイベントをきっかけとして築かれる横のつながりは、イベントのみならず今後の船場のまちづくりにおいて更に重要性を増すものと思われる。

■成果と今後

「セミナー&サロン」の会場などで実施したアンケートによれば、参加者の満足度は非常に高く、まちの活性化に貢献する意義ある試みとして高い評価を受けた。本プロジェクトの目的は短期的には多くの参加者に船場という街の魅力を感じ取ってもらうことであり、今回「まちのコモンズ」全体で延べ約800名の参加を得て多くの方から評価を得たことはひとつの成果といえる。

しかし長期的には本プロジェクトを一過性のイベントとして終わらせるのではなく、地域に根付いた催しとして如何に定着させていくかを考えなければならない。前回・今回と企画段階において街の人々の横のつながりが生まれ、それがイベントの終了後も日常的なコミュニケーションのきっかけとなるなど一定の成果は生まれているが、今後は地域の人々や組織などに企画の最初期段階からより深く参画してもらい、主体性をもってプロジェクトを組織・実行してもらえる体制づくりを考えなければならないだろう。来年度の開催に向けて、対象範囲の設定も含め、そのあたりが大きな課題となる。

■高岡伸一(都市研究プラザ特任講師)

Over a six day period from November 16 to 21, 2009, the Senba Art Cafe sponsored the 'Urban Commons 2009' program using the Senba neighborhood as a venue. This project is an attempt to explore the possibilities for revitalization of the area, utilizing the various spatial resources of the neighborhood to popularly disseminate the history and culture of the area. This year the program focused on the three areas of Koraihashi 2-chome and the adjoining Fushimi-machi 2-chome and Dosho-machi 2-chome neighborhoods. A number of different programs were put on at the Senba Art Cafe aimed at these neighborhoods which have not adapted well to changing times and which are confronting many difficult issues, and ways were considered of drawing out the underlying history and culture of the area. Specifically, live performances of Asian music were held in the public open spaces of buildings, films relating the history of the area were projected in the neighborhood in the evening, and a symposium was held using as its venue the chapel of a church which is a historical building in the neighborhood, among other events. Additionally, a panel discussion was held in a traditional wooden residential building which has been designated as an Important Cultural Property, there was a tasting event at an old restaurant, and there were lectures on its history held at a shrine which supervises traditional observances in the neighborhood. A total of about 800 people participated in all these events. This program is scheduled to be repeated next year. A big issue is likely to be how to get more people from the neighborhood to participate more deeply in the events for next year.